

設立の頃の気持ちにかえて

重 富 久 代

(京都市立病院図書室)

昭和59年3月設立10周年の式典を迎えた時、会員特に協議会活動を指導してきた幹事の方々の喜びは、一入だったと思う。そして早や5年たち15周年を迎えることになった今、協議会活動は地道にはあるが、ますます充実してきている。

ここで、あらためて15年前の設立当時を思いかえしてみると、私も微力ながら発起人の一人として一途に会の結成と会活動の意義付けに一生懸命だったことがなつかしく思い出される。当時、病院図書室は他の機関との交流が皆無に等しく、整備された少数の図書室を除いて、その多くは本の倉庫のようで、担当者も本の番人のようだった。私自身も同じ状況の中において、ただ本の整理が司書の使命かのように、黙々として仕事をしてきたが、心の中のどこかで同じ仕事をする仲間と連絡し合い、日常業務上の疑問を話しあいたいという小さな希望もっていた。病院図書室の本来の仕事とは、その役割とは何かなど考えていた時、担当者同士の横のつながりのある連絡組織を実現し、さらに図書室の充実を図ろうという呼び掛けがあり素直にとびついた。昭和49年8月24日、元国鉄梅田駅での初顔合わせを皮切りに、設立まで月2～3回京都・大阪で会合し、準備した。そして具体的な組織化のために100床以上の病院208機関宛アンケート調査をし、その結果協議会設立への意向を確かめることができた。また設立へ向けての具体的な計画を作るため、先駆的な組織日本医学図書館協会の関西地区理事であった吉本瑞応氏(元奈良県立医科大学図書館)をたずね相談をした。吉本氏には会活動が軌道に乗るまで非常にお世話になり、また励ましをいただいた。「会組織は個人ではなく、団体加盟にするべきだ」と忠告をしてくださったのも吉本氏だったと思う。現在雑誌総目録の作成や、年次統計等継続的な事業を推進できるのは、この団体加盟の成果と言えよう。

11月16日晴れて設立総会を開くことができた。

初会員22機関のうち16人の会員の参加を得、数々の祝辞もいただき、小さい団体ながら輝かしい出発だったように思う。その当時の京都市立病院長から祝辞の一節に「すべての病院が経営問題で氣息えんえんとしている中で、病院図書室の発展のため機関を作ろうというフロンティア・スピリットに敬意を表する」という褒め言葉をいただいた。組織化への発意から1～2年の活動状況は、この精神でもって猪突猛進のごとく突走っていたように思う。

私の役割分担は研修であった。当初はまず、会員同士の交流と病院における図書室の仕事と役割を知り、自分の図書室の業務に還元できることが第一であった。役員も研修会の経験が少なく、自分自身がまず研修したいという気持ちを持っていたこと、またそれまでの一人よがりな図書室運営に疑問を抱いていたこと等から、研修会の講師は図書館(主に医学図書館)関係の先輩諸氏にお願いするしかなかった。そして内容的にもとにかく一からで、図書館実務(病院の中にある特殊性をふまえて)を担当者が理解することから始まった。第1回目は「病院図書室のあり方と職員の任務」と題し、永年病院図書室に勤務され医学図書館協会との関わりの深かった故朴木貞子氏に講演をお願いした。会場は小さいながらも一杯だった。私にとってこの初めての研修は一種のカルチャーショックとでも言えそうな強いインパクトがあった。Librarianshipに目覚めさせるような内容だったように記憶する。その後も大阪大学中之島分館など幾つかの大学図書館に頼りながら、医学という分野での図書館の仕事を目新しさと難解さがいりまじった思いで一生懸命研修したように思う。今から思えば、他機関へ依存的であったが、計画、講師依頼、案内、資料作り、報告を毎月行うことができたエネルギーは、担当者の唯一自己研鑽の場であったことと、担当者を通して、病院において少しでも早く図書室活動を根づかせたいという

役員的情熱によるものであった。その気持ちは、現在毎年計画実行される事業、年数回の研修会、会報会誌の発行、年次統計などの継続活動に、また文献情報の相互協力ネットワークを、さらに図書室の充実と医療情報活動へ貢献するために強化しようという高い理念に生きていると思う。研修会を例にあげれば、各回協議会会員が講師や研究発表者となり、後輩を育てている。またその他関係学会にも積極的に参加し発表を行っている。このように孤立していた病院図書室は研修会を機会に、容易に担当者同士の意見交換や親睦が計られるようになり、研修会を企画する側も受ける側も現在の情報化の波に対応すべき力を蓄えてきている。一方、図書室を取り巻く情勢はきびしく、担当者自身の努力により、利用者層を拡げ、情報提供サービスを向上させようとしても、病院の中

においては、残念ながらまだその支援体制が整っている機関はそう多くない。

病院図書室の標準化について議論がかわされ、当協議会では実務面での標準化を図るため1984年に「病院図書室マニュアル」を編集している。現在、東京では日本病院会図書室部会が基準案を日本病院会に答申されたということである。また、各方面における医療関係図書室間や医学図書館を含めたネットワーク化も進んでいるが、これらの動きが病院図書室の存在にとって、よい影響をもたらすことを願っている。

図書室活動を病院の中において根づかせようとする会の目的に向って、会組織と会員個々がもう一歩進んだフロンティア・スピリットで努力したいものである。

ゼロからの出発

千住とも子

(日生病院図書室)

近畿病院図書室協議会(病図協)創設の頃のことを書くように編集部から電話があった。すでに設立時の現状と問題点の分析・報告¹⁾、病図協の10周年の総括²⁾があるのに何をいまさら書くことがあるのだらうと思いつつ15年前を振り返ってみるが、何しろずいぶん前のこととて裏話も思い出せない。ただ、大阪市内からは遠い京都市立病院、京都南病院、星ヶ丘厚生年金病院等へ幹事会や会報編集の打ち合わせなどで足繁く遠出したことを覚えている。

そういえば、あの当時も今もよくわからないのが創設時の財政のことである。病図協は誰からの、どこからの要請でもなく、有志の発意によって呼びかけが行われ、準備会のようなものができ誕生したのであるが、そこには何の財政的基盤もなかった。設立準備のための費用を拠出した記憶がないのに無事病図協が設立された。意志あるところ道ありとでもいうのだろうか。いみじくも会報第1号(1974)に述べられているように、「会の

財政について：会費を2,000円とする案をたてた頃から実際に活動を始めるまでの間に、印刷費その他の物価の値上りで既に年間5~6万円の赤字が見込まれている。何等かの対策を講じなければならぬが、当分このままで活動していくことにする。研修会は出来るだけ参加費によって独立採算でやっていく。」として出発したのである。その後の会報を辿ってみると、初期5年間は財政に関する記事が散見されるのであるが、5年を過ぎるとそれまでの財政的あえぎがまるでうそのように会報に現れなくなっている。パイオニアに苦労は付きものとはいえ、財政ゼロからのその苦労の軌跡を再度会報に追ってみたい。

「会の財政について(赤字対策)」(会報通巻2号, 1974)、「寄付の報告、カンパのお礼」(同5号, 1975)、「カンパのお礼」(同8号, 1975)、「第2回総会 — 会運営の強化：財政、会費改定；今年度は年間会費2,000円という低額な会費の徴収を行ったため、度重なる事務連絡、